第４章

旧植民地出身者―陳信徳

はじめに

中華人民共和国（以下，新中国）における日本語教育は，共産党政権の誕生に伴って再開された．その歴史を振り返ってみると，大まかに 2 つの時期に分けることができる．前期は，新中国が成立した 1949 年からプロレタリア文化大革命（以下，文革）が始まる 1966 年まで，後期は，中日国交回復に向かって急速に展開した 1970 年からである．その間の 4 年間は文革によって中断され，日本語教育の空白期となった．なお，この分け方は，基本的に中日関係史や中日貿易史とも一致している．

後期には，1972 年の国交正常化を象徴する中日共同声明と，鄧小平が復活し 1978 年に締結した中日平和友好条約によって，日本語教育は着実に展開され始めた．さらに 1978 年の民間における中日長期貿易取り決めの締結と，1979 年の日本政府による中国への大規模な経済協力の確約によって驚くべき加速をみせた．両国交流の繁栄を支える言語教育の重要性が再び確認された．

ところで前期は，これとまったく状況を異にする．日本との長い戦いが終わって間もなく，当然国交もまだなかった時期であった．当時，冷戦が展開されており，中国はアメリカを主とする西側陣営の封鎖を防ぐために，近隣の敵対国であった日本との関係修復に乗り出した．まずは「民間貿易」という線で日本と接触し，国交回復への道を模索した．その担い手を養成するため，日本語教育が始まったのである．このように，新中国における日本語教育は，荒廃する中日関係のなかで，民間交流の使者を養成するために開始された．その先駆けとなった教育機関は北京大学の日本語学科であり，中心となったのが陳信徳であった．

しかし，陳信徳が新中国における日本語教育の草分け的存在であったにもかかわらず，残念なことに，今日まで陳に関する本格的な研究はない．陳が教鞭を執っていた北京大学日本語学科ですら，徐昌華「陳信徳先生的学術思想与治学逸事」[1]という回顧文程度のものしかなかった．陳の主な研究業績や日本語研究の特色を大まかに紹介したものの，陳の経歴さえ述べていない．陳信徳に関する研究はこれからの課題であると言って良い．

本章では，こうした状況を踏まえて陳信徳について研究を試みる．具体的には，以下の 3 つを明らかにする．

1 つは，『第三高等学校一覧』や『京都帝国大学一覧』，陳の妻である平林美鶴が書いた回顧録『北京の嵐に生きる』（悠思社，1991 年）など一次史料を駆使し，陳信徳の経歴をより具体的に明らかにする．旧植民地台湾に生まれた陳信徳が，時代の荒波に翻弄されつつも信念を貫き，結果，新中国の日本語教育を担ったルーツを明らかにする．

2 つは，陳信徳が編集した北京大学日本語学科の日本語教科書の特徴を明らかにし，陳が新中国の日本語教育に果たした役割を明らかにする．

3 つは，教師としての陳信徳の姿を明らかにする．

第 1 節　経歴

(1) 日本占領下台湾に生まれた陳信徳

陳信徳は，1905 年 1 月 28 日に，日本占領下の台湾台北市淡水に牧師の次男として生まれた．中学三年生の時に日本に渡り，京都大学理学部に在学中の兄，陳能通を頼り[2]，同志社中学（旧制）に編入した[3]．

1928 年，23 歳の陳は第三高等学校（旧制）理科甲類に進学し，1932 年に卒業した [4]．後，1 年の浪人生活を送った．

1933 年，28 歳の陳は京都帝国大学文学部文学科中国語学中国文学専攻に進学した．当時，京都帝国大学の中国語学中国文学講座は二つに分かれていた．1 つは鈴木虎雄教授が担任したが，もう 1 つは鈴木虎雄教授と倉石武四郎助教授の連名で，事実上は倉石武四郎助教授が担当した．講師陣には中国哲学史を担当する吉川幸次郎，中国語を担当する徐仁怡，中国語と中国文学を担当する傅芸子がいた [5]．

陳は「大学では中国文学を専攻し，当時中国語学や文学の方面で学界に新風を巻き起こしておられた若き日の倉石武四郎先生，吉川幸次郎先生等の教えを受けた」．また，中国の標準語は上手く話せなかったため，「当時北京から京都大学に赴任して来られた中国人教師傅芸子先生のもとに毎週中国語の個人教授を受けに通い，中国語（北京語）の修得」につとめた．陳は「中国人」とはいえ，植民地台湾に生まれ育ち，日本語を「国語」として身に付けたので，ネイティブな日本語が話せた．一方，中国語は，故郷福建の方言は話せるものの北京語は十分ではなかったのである．

生活面では，新聞配達，家庭教師，ガリ版切りなどいろいろなアルバイトをしながら学生生活を送った [6]．

1936 年 3 月，陳は京都帝国大学を卒業し，文学士学位を取得した．

1936 年 4 月，31 歳の陳は同大学大学院に進学 [7]，と同時に文学部の副手を務めた [8]．引続き倉石武四郎に師事し，「支那ノ音楽ニ就テ」という題目で課題研究に従事した [9]．

1937 年 6 月，32 歳の陳は新婚の妻，平林美鶴を連れて北京に留学した．北京での宿舎の世話から駅の出迎えまでいっさい世話してくれたのは，同じ大学院に所属しながら北京に留学し，「支那儀礼」を研究する平岡武夫であった [10]．

ところが，まもなく蘆溝橋事件が勃発し，戦火は北京に飛び火した．避難のため，北京の大学は南方に遷り，始まったばかりの陳の留学生活は事実上終わりを告げた．この頃の陳は笛を習ったり，日本占領下の北京中央放送局の設置を手伝ったりした．

1938 年 1 月，北京中央放送局が成立され，陳は社員として採用された．仕事は順調で，華北放送協会会長の随員としてたびたび日本へ出張した．

1945 年 8 月 15 日の終戦を境にして陳の人生は一変した．日本占領下の台湾に生まれた陳は，好むと好まざるとにかかわらずこれまで「日本人」であったが，終戦にともない「中国人」になったのである．

終戦後，中国では内戦，即ち国民党と共産党の戦いが始まった．陳はすぐにでも故郷である台湾に戻りたかったが，内戦拡大によってやむを得ず北京に留まっていた．そんな中 1948 年，台湾台北市淡水中学校校長を務めていた兄陳能通が二・二八事件で国民党に殺害された．年老いた父は悲しみの中，陳に台湾に帰って来てはならぬと伝えてきた．

1949 年 1 月，北京は解放された．在北京の台湾人たちは「台湾民主自治同盟」を結成した．陳は台盟北京支部委員に選ばれ，宣伝部で働くようになった．この時から，陳は市川正三『日本共産党小史』や渡部徹『日本労働運動史』などを翻訳し始めた．『日本共産党小史』は仕上げたが，出版には至らず，『日本労働運動史』は 1951 年に東方書社より上下二冊として出版した．陳が世に出した最初の書物である．

(2)新中国北京大学の日本語教師へ

建国初期の中国では，冷戦，すなわちアメリカを中心とする資本主義国家陣営の包囲網を打破するために日本との友好の道を開こうとしていた．こうした政治的要請を背景に建国当初から日本語教育が始まった．その使命を担ったのは，北京大学であった．

しかし，当時の北京大学は，日本語教師が非常に乏しく，今西春秋副教授[11]と魏敷訓副教授[12]しかいなかった．今西は満州史の研究のために中国に留まった日本人で，中国語がある程度できるものの，中国語で日本語の文法を説明する教科書を編集することは難しかった．一方の魏は日本文学を専攻し，日本留学の経験を持った中国人であったが，日本語を日本人のように把握できてはいなかった．このような事情から北京大学は，中国語はもちろん，日本語も自由に操る人材を欲っしていた．

そんななか偶然にも，1949 年秋，陳の住む四合院に今西が引っ越して来た．同じ京都帝国大学文学部の出身で，「家族ぐるみの親しいお付き合いをすることになった」[13]．植民地台湾で生まれ，母国語である中国語がもちろん，小学校から日本語を「国語」として学んできた陳のことを知った今西は彼を北京大学に紹介した．こうして，1950 年夏，45 歳の陳は北京大学の日本語教師となった．

「9 月の新学年から教壇に立つために，あれやこれやと日本語の文章を読みあさり，日本語文法の勉強をはじめて日もなお足りないといったありさまであった」．日本語のテキスト『日文初階』を執筆し，「今西氏には毎日のように教えを請い，また時には意見の交換をしたりして二人ともいかにも興味津々という風に見うけられた．今西家の当時四歳くらいのお子さんが，遊びながら『これは“は”ですか，“が”ですか』などと口まねをしていた」というほど，陳と今西は日本語テキストの作成に熱を入れていた．こうして 9 月いよいよ教壇に立った夫の様子を妻は，「学生たちの評判もよく，私も今度こそ彼は適所を得たと思い，彼のために喜んだ．授業のかたわら日本文選を作って注釈を書いたり翻訳の筆を執ったりした」と回顧した[14]．

ところで，このような穏やかな日々は長く続かなかった．1950 年 9 月 26 日，今西は同じく北京に在住する友人山口隆一を自宅に招待した．自分の家は多くの書籍で溢れかえっていて手狭なので，陳の家の座敷を貸りて夕食会となった．この夕食会の最中，毛沢東暗殺を企てた国際スパイ大事件の主犯として山口が突然官憲に逮捕されたのである．山口は翌 1951 年夏に銃殺され[15]，今西も関連者として逮捕された．ちょうどこの頃から，北京・天津の高等教育機関で「文化戦線上の革命闘志になるため」の教師の思想改造運動が始まり，やがて自分の私生活を含む過去の経歴を大小もらさず忠実に組織へ報告し，自己批判をする「忠誠老実交清歴史的運動」に発展した[16]．戦前日本占領下の北京で日本の放送機関で働いていた過去を持ち，つい最近では自宅で逮捕者が出て，さらにその人物が処刑された．加えて自分を北京大学に紹介した今西が反革命罪で逮捕されたことは，陳への風当たりを強くするのに十分過ぎるものだった．結局，「北京大学では陳信徳の個人の経歴に関する結論は出さず，それを中央人事部の手にゆだね」た．以降，中央人事部による陳個人の経歴に関する取り調べが始まった．

この取り調べは 4 年にも渡った．この間，陳は授業以外の公の活動が止められた．精神的苦痛に耐えながらも日本語の研究に努めた[17]．この時期の研究蓄積は，後に著書にあらわれた．

1956 年，陳に対する調査結果が発表された．「政府はあなたを全面的に信じている．国家のために一生懸命働いていただきたい」という全面肯定の「結論」である．こうした「結論」を踏まえ，北京大学は陳を改めて起用し，翌 1957 年に陳を日本語教研室主任に抜擢した．陳が 52 歳のときであった．それから文革までの約 9 年間は陳にとって人生の最も安定した時期で，多くの研究成果が実った．

陳が北京で日本語教育のために努力していることを非常に喜んでいたのは，恩師倉石武四郎であった．倉石が編纂中の中国語辞典の中の難解な字句について陳に調査を依頼するなど研究上の協力関係がみられた．手紙には「人の種子は播いておくべきものだと思いました」と弟子の成長を喜ぶ師の心持ちを吐露している．また，1960 年に北京を訪問した際は，多忙な日程を繰り合わせて北京第三病院に入院していた陳を病室に見舞った．この訪問を受け，陳は「たいへん感激した」という．海を隔てた二つの国にあってともに言語研究に従事する師弟間には強い絆が結ばれていた．

(3) 文化大革命で獄死

1966 年 5 月，文革が始まった．最初，攻撃の矢は一部の指導者に向けられていたが，次第に政治的弱点を持つ普通の人々に拡大していった．たとえば戦前において日本人に協力した者，国民党と関係があった者，親族に日本人や国民党関係者または地主や資本家がいた者，これらの人々はすべて攻撃の対象となった．医師，学者などあらゆる知識人や文化人が修正主義者，あるいは走資派として批難と弾圧の対象となった．

陳は恰好の攻撃対象となった．まもなく「壁新聞」が貼られて，「抗日戦争時代，日本帝国主義と協力して反共宣伝をやり，その後も多くの日本人と交際があり，殊に解放後は国際スパイ山口某と関係があり，またその友人で文化特務の今西某とは特に親しく，最近に至るまで文通している」とか，「自己の著作のみに専念して授業に出ていない」など批判的な文章が続いていた [18]．以降，陳は厳しい弾圧を受け始めた．8 月学生たちが突然，陳の自宅を訪れ，花や花瓶が多いことを挙げ「まるでブルジュアの生活だ」と批判した．さらに 9 月に強制労働にかり出され，自宅も学生に抄家（家宅捜査）された．戦時中に隣り組で買わされた日の丸の旗と国民服が見つけ出され，反革命の証拠として学内の反動物件展覧会に展示された．さらに紅衛兵たちは陳の家に乱入し，陳に尋問をかけたり，ベルトでリンチするなど暴行を繰り返した．1968 年 6 月，「問題を調査するため」，陳は大学に隔離され，監禁された．この隔離は 9 ヶ月に及び，その間に陳は 2 回も入院を余儀なくされるほど心身を痛めつけられた．

1969 年 3 月 1 日，陳は一時的に帰宅療養を許され，しばらく自宅で過ごした．8 月 8 日，大学は東運動場で全学の集会を開いた．陳は北京大学「工人解放軍毛沢東思想宣伝隊」のリーダーに「日米反動派のスパイ」として「厳罰に処する」と宣告され，台上に引き上げられた．「日米反動派のスパイを打倒せよ」と拡声機ががなり立てる中，その場で公安部門の人に引き渡された．最初は北京市西南隅の「公安第×部隊」に拘束されたが，いつしか千キロ以上も離れた山西省の山奥の牢獄に連れていかれた．

1970 年 12 月 20 日，陳はこ山西省の牢獄で病死した．陳の死について政府から知らせがあったが，妻は遺骨も「胸に抱いたことがない」という [19]．陳の死後，家族は「反革命家族」として教員宿舎から追い出された．また，これまで夫の給料で生活していたが，夫

の死で収入が途絶え，古着や家具を売ったりするギリギリの生活を強いられた．

1972 年，中日国交が回復した．中国に暮らしていたすべての日本人にとって事態は好転した．これを機に陳の妻は陳の潔白を証明するために関係部門に請願書を書き出始めた．幸い請願書が受け入れられて，長い調査が始まった．

1974 年 11 月，陳の妻は北京大学東方語言学部に呼び出され，「陳信徳の問題は“人民内部の矛盾”」であり，「無罪」であるという調査結果が伝えられた．翌日，学部でこの調査結果が公表されたが，四人組がまだ政権から離れておらず，全校公表には至らなかった．結局，陳の名誉回復を正式に全校に公表したのは，四人組が逮捕された後の 1978 年 4 月であった．「日本とアメリカのスパイというのは全くの事実無根で，四人組のこじつけによるものである」とされた．

第２節　陳信徳と北京大学日本語学科の日本語教科書

前章で陳の経歴が明らかとなった．大きな時代のうねりの中を生きた陳がその生涯をかけて従事してきた日本語教育について，ここからは見ていきたい．

(1)初期の日本語教科書編纂

新中国は社会主義国家でそれまでの中国と違ったイデオロギーをもっている．そのため，これまでの教科書がほとんど使えなくなり，その新しい思想に相応しい教育内容や教科書の開発が急務となった．

ところで，当時の北京大学日本語学科では，日本語教師の数が非常に乏しく，とりわけ 1951 年に今西が逮捕されてから，1954 年に岡崎兼吉 [20]が専任講師として着任するまでの間，日本人教師不在の状況であった．また，教師陣を充実させるため，1951 年に劉振瀛が副教授 [21]，1952 年に徐祖正が教授 [22]，1953 年に孫宗光が助手として着任した．彼らはみな日本留学を経験してはいるものの，どちらかといえばネイティブな日本語ではなかった．これは外国語を学んだものなら誰もが理解できることだが，ひとつの言語をネイティブと同じように使いこなせるようになるのは並大抵のことではない．筆者自身，日本へ留学して 18 年になるが，いまだネイティブとはほど遠い状況である．こうした環境の中，陳のようなネイティブな日本語を話せるものが重要視された．

当時作られた教科書は，校内流通に供するもので，ほとんど謄写版で仕上げられた．元々の紙の質が悪い上，文革による大量破棄で現存するものはほとんどない．筆者が北京大学日本語学科図書室を初め，北京大学図書館，中国国家図書館，北京市図書館，上海図書館を調査した結果，以下の 6 冊を発掘した．これらは現存する文革前の北京大学日本学科の日本語教科書である．いずれも 1950 年代後半のもので，校内流通のためか，編集者を個人名で明記せず，「北京大学東語系」や「北大東語系」といった表記がされた．この 6 冊は，新中国の日本語教育史研究にとって幻の史料といえるだろう．

①『基礎日本語教科書』北京大学東語系，1957-58 年第一学期，311 頁，ガリ版．

②『日三分析』北大東語系，1958-59 学年第一学期，140 頁，ガリ版．

③『日本語一年教材　第一至十五課』北京大学東語系，1960 年，184 頁，ガリ版．

④『日本語二年級教材　第一課至十課（日二詞彙)』北京大学東語系，1960 年，100 頁，ガリ版．

⑤『日四郵材』北京大学東語系，1960 年，82 頁，ガリ版.

⑥『日五分析課文』北京大学東方語言系，1960 年，98 頁，ガリ版.

6 冊のうち，①と③は 1 年生用のものであった．④は 2 年生用のものであった．②は 3 年生用のものであった．⑤は 4 年生用のものであった．⑥は 5 年生ようのものであった．

当時の教科書は編者名が記しておらず，6 冊の内，陳が編集したものがあるかどうかは容易に判断できない．陳と共に日本語学科で働いた孫宗光の証言によると，陳は中国語で日本語の文法を解説する低学年，すなわち 1-2 年生の教科書づくりを任された[23]．ちなみに，建国初期の北京大学は 5 年制であった．

孫宗光の証言に従い，1-2 年生用の①，③，④の 3 冊は陳が編集したと思われる．実際，1957-58 年に使用された①『基礎日本語教科書』と，1960 年に使われた②『日本語一年教材　第一至十五課』の間の 1958 年と 1959 年，陳信徳編著『現代日語実用語法』の上下二巻（時代出版社，上巻 1958 年 274 頁，下巻 1959 年 322 頁）は相次いで出版された．次で述べるが，この 3 つの書籍の目次を出版年順で並べてみると，その相似性が現れている．『基礎日本語教科書』と『日本語一年教材　第一至十五課』は，孫宗光の証言の通り，陳が編著したものと理解できる．また，④『日本語二年級教材　第一課至十課（日二詞彙)』については，編集者の特定ができない．

これらの本は陳の「数年にわたる授業経験の集大成」であり[24]，とりわけ『現代日語実用語法』は新中国における最初の日本語文法書の出版物である．出版当時から大きな反響を呼び，1962 年 4 月まで 5 回増刷され，前 4 回の増刷数は不明であるが，第 5 回のみでも 25,400 冊であった[25]．1962 年 7 月に再版されて 6 回も増刷し，計 46,700 冊が発行された．さらに 1964 年 1 月からは商務印書館より再版され，31,200 冊が発行された[26]．

日本語教材がこれほど歓迎された背景には，政治的な国際環境の変化があったと思われる．当時の中国は，建国以来のソ連との親密な関係は 1956 年 2 月に行われたフルシチョフの「スターリン批判」をきっかけに悪化し，1960 年には中国に派遣されていたソ連人技術者が一斉に引き揚げられるまでに至った.これにより中国経済が大きな打撃を受けた.また，アメリカとの関係は敵対的なままであった．一方，日本においては安保改定の後，岸信介内閣が退陣し，池田勇人内閣が誕生した．吉田茂内閣から岸信介内閣まで中断に追い込まれていた両国の民間貿易は少しずつ復活するようになり，1960 年に周恩来総理の「政治三原則」のもとに「貿易三原則」が協定された．さらに 1962 年に「日中総合貿易に関する覚書」（通称，LT 貿易）が成立した．こうした中ソ関係，中日関係の変化に伴い，中国は日本との民間貿易や日本の科学技術の導入に力を入れていた．田中明彦『日中関係 1945-1990』（東京大学出版会，1991 年）と北京大学に招かれたこともある科学者伏見和郎『科学技術者のみた文革前後の北京大学』（日中出版，1980 年）にはこうした時代の特徴が描き出された.

とりわけ，日本との民間貿易の再開と日本の科学技術文献への渇望は，日本語独学者を増加させた．陳の著書はまさにこの時代の要請に応えるもので，その売れ行きはその変化を反映したといえる.

(2)教科書の内容と特徴

まず，①『基礎日本語教科書』（1957-58 年）と，②『日本語一年教材　第一至十五課』

（1960 年）と，1958 年と 1959 年に出版された陳信徳編著『現代日本語実用語法』（上，下巻）の目次を，一覧表に示す.

中国語原文	日本語訳文
『基础日本語教科书』（1957 － 1958 年版）	『基础日本語教科书』（1957 － 1958 年版）
第一章 導論	第一章 導入
第二章 発音和字母（即假名）	第二章 発音と假名
第三章　詞汇	第三章　単語
第一課　断定句	第一課　断定型
第二課　定态句	第二課　定態型
第三課　存在句	第三課　存在型
第四課 敬体的动态句和助詞	第四課 敬体の動態型と助詞
第五課　数詞	第五課　数詞
第六課　簡体的动态句和动詞的終止形・連用形・未然形・連体形	第六課　簡体の動態型と動詞の終止形・連用形・未然形・連体形
第七課 过去的句型---四段活用动詞的音便	第七課 過去の文型---四段活用动詞の音便
第八課　用言的复合和連接	第八課　用言の複合と連接
第九課 动詞的进行态，存續态和完成态	第九課 動詞の進行態，存続態と完成態
第十課　命令句和推量句---动詞的命令形和未然形（下）	第十課　命令型と推量型---動詞の命令形と未然形（下）
第十一課　形式体言和形式用言	第十一課　形式体言と形式用言
第十二課　条件句的构成--假定形	第十二課　条件型の構成--仮定形
『現代日本語実用語法　上冊』（時代出版社，1958 年版）	『現代日本語実用語法　上冊』（時代出版社，1958 年版）
第一篇 导論，发音和文字	第一篇 導入，発音と文字
第一章　日本語的概要	第一章　日本語の概要
第二章　发音和字母（即假名）	第二章　発音と仮名
第三章　詞彙和汉字	第三章　語彙と漢字
第二篇　基础句型和主要助詞	第二篇　基礎文型と主な助詞
第一章　断定句	第一章　断定型
第二章　定态句	第二章　定態型
第三章　存在句	第三章　存在型
第四章 动态句（一）	第四章 動態型（一）
第五章　动态句（二）	第五章　動態型（二）
第六章　推量句	第六章　推量型
第七章　动态句（三）	第七章　動態型（三）
『現代日本語実用語法　下冊』（同上，1959 年版）	『現代日本語実用語法　下冊』（同上，1959 年版）
第三篇 詞法	第三篇 詞法

第一章　体言	第一章　体言
第二章　用言	第二章　用言
第三章　助動詞	第三章　助動詞
第四章　副詞，連体詞，接續詞和感歎詞	第四章　副詞，連体詞，接續詞と感歎詞
第五章　助詞	第五章　助詞
第六章　詞的构造和轉变－詞彙学	第六章　詞の構造と転換－語彙学
附録	附録

日本語一年教材　第一至十五課（1960 年版）	日本語一年教材　第一から十五課（1960 年版）
第一課　断定句	第一課　断定型
第二課　定态句	第二課　定態型
第三課　存在句	第三課　存在型
第四課　动态句的敬体形式和格助詞	第四課　動態型の敬体形式と格助詞
第五課　数詞	第五課　数詞
第六課　动态句的簡体形式和动詞的終止形・連用形・未然形・連体形	第六課　動態型の簡体形式と動詞の終止形・連用形・未然形・連体形
第七課　过去的句型---四段活用动詞的音便	第七課　過去の文型---四段活用動詞の音便
第八課　用言的复合和連接	第八課　用言の複合と連接
第九課　动詞的进行态，存續态和完成态	第九課　動詞の進行態，存続態と完成態
第十課　命令句和推量句---动詞的命令形和未然形（下）	第十課　命令型と推量型---動詞の命令形と未然形（下）
第十一課　形式体言和形式用言	第十一課　形式体言と形式用言
第十二課　条件句的构成--假定形	第十二課　条件型の構成--仮定形
第十三課　动詞的被動态和可能态	第十三課　動詞の能動態と受動態
第十四課　动詞的使役态	第十四課　動詞の使役態
第十五課　形容詞，形容詞型助動詞，特殊型助動詞的变化	第十五課　形容詞，形容詞型助動詞，特殊型助動詞の変化

『基礎日本語教科書』（1957-1958 年）と陳信徳編著『現代日本語実用語法』（1958-1959 年）の目次を比較すると，いずれも日本語の概要，発音，仮名，語彙など日本語の全体構造を大まかに説明する部分と，断定型，定態型，存在型，動態型という文法や文型を説明する部分という二部分より構成された．構成が酷似していることがわかる．また，『日本語一年教材　第一至十五課』（1960 年）は，日本語の概要，発音，仮名，語彙など日本語の全体構造を別にして，断定型，定態型，存在型，動態型という文法や文型のみの説明に絞った．試行錯誤しながら教科書を編集していた様子が窺える．

ここでは，陳の『現代日語実用語法』を事例として，陳が編集した教科書の特徴を明らかにする．

陳は『現代日語実用語法』を編著する際，多くの工夫を施した．まず，最初の内容は日本の小学校で 1 年生が使用する国語教科書の最初の部分と同じように，漢字が全くなく，

すべて仮名で記した．このような記述の仕方は，現在の日本語教科書，つまり最初から漢字仮名交じり文で記すものと根本的に違うのである．漢字は両国共通の文字であり，漢字仮名交じり文を使っても良さそうなものだが，あえて仮名だけで記したのは，植民地台湾で生まれ，日本の国語教育を受けた陳自らの日本語習得経験からの発想とも考えられる．また，日本語を学ぶ中国人にとって漢字という共通の文字を使うがための困難を，陳は認識していた．一字一音の中国語に対し，日本語は一字に対しいくつもの読み方がある点や，一つの単語に数種類の表記方法がある点（たとえば，蛋白質という言葉は，蛋白質，たん白質，たんぱく質と表記するなど）など．これは日本語を学ぶ上での「想像もできないような困難」となるというのである[27]．こうした漢字の罠に陥らないようにするために，学習の初期の段階では漢字を排除して，すべて仮名で表記したのではないだろうか．

次は，内容の構造である．「内容提要」の冒頭で書かれたように，本書は独学者のための文法書である．従って内容の叙述は基礎的な知識から次第に深めていくようになっている．第一部は日本語の略史や大まかな特徴などを概説し，その上で，発音と文字を解説していく．こうした基礎的知識を踏まえ，第二部と第三部では基本的文型や主な助詞，さらに品詞，とりわけ体言，用言，助動詞，副詞，連体詞，接続詞，感嘆詞，助詞を順次に説明し，最後に品詞の構造と変換という語彙学の説明をもって纏めた．文法理論の説明を重視していたことが分かる．こうした系統的な解説は，初心者はもちろん，日本語をある程度習得した読者にも対応できる．また，日本語教師の参考図書としての役割も果たした[28]．

日本語の文法を系統的かつ分かり易く読者に伝えるため，陳は日本の多くの国語学者による文法理論を参考にした．それを示すのは同書最後の「参考書目挙要」である．とりわけ，体言や用言など品詞の分類や解説については，橋本進吉の橋本文法（すなわち，学校文法），時枝誠の時枝文法，山田孝雄の山田文法を参考したとみられる．また，活用や動詞の分類については，佐久間鼎や『象は鼻が長い』などの日本語研究で知られている三上章の動態文型などを取り入れたとみられる．ちなみに，三上章の日本語文法は陳の紹介によって初めて中国で知られることになった．

このように，陳の著書が上々の売れ行きを見せていた背景には，こうした陳の日本語研究の努力および様々の読者層に対応できるような文法解説によるものであったと思われる．日本語の文法書が林立している現在でも，陳のこの大作は依然色褪せない存在感を持っていると思う．

陳の著書は，文革中に一時発売禁止とされたが，中日国交の回復によって再び出版された．『現代日語実用語法』は 1972 年に香港で出版され，文革後の 1980 年 12 月，1983 年 5 月，1988 年 5 月の 3 回，商務印書館より再版があった．

新中国における日本語教育は，陳信徳によってその教材が確立され，ひたすらに進められてきた．陳の日本語研究の成果によって，文革前後の中国の日本語習得者は支えられていたといえよう．

第３節　教師として

陳は学生に尊敬された教師であった．文革前は陳の「家にはほとんど毎日のように何人かの学生たちが遊びに来ていた．（中略）正月などは，あまり大勢で来るので家中学生たちでいっぱいになり，立食パーティのように私の用意した簡単な食べものをまたたく間に

たいらげてしまい，笑い声が家中に溢れたものだった」[29]．陳に娘が誕生した折り，学生有志は陳に一冊のノートをプレゼントした．なかには，学生たちから心のこもった言葉があった．陳と学生の絆を感じられる文章なので，少々長くなるが，ここに記しておく．

亲爱的陈先生

我们实在想不出，用什么好礼物，赠送给令媛---我们的小妹妹．

我们送上这个小本子的意思，是想让她的爸爸妈妈在工作间暇的时候，代她写些日记．

我们希望，将来她能在这个小本子里，找到一些自己婴儿时代天真的微笑，淘气的啼哭，以及父母无限的慈爱，关怀和培养，也许这会使她找到一些时代的影子呢．

［1954.12.14］

（訳文）親愛なる陳先生へ

私たちはいくら考えてもどんなプレゼントをしたらいいか思いつかないのです．先生の娘さん―そして私たちの可愛い妹に．

そこで一冊のノートを贈ることにしました．このノートにご両親が仕事の合間をみてちょっとした日記を書いて欲しいのです．

将来，彼女がこのノートを開くとき，自らの幼い頃の天真爛漫な微笑み，無邪気な泣き声，そしてご両親が無限の愛で彼女を慈しみ育ててきたことを知るでしょう．そうした時代の１ページをひもとく助けとならんことを願うのです．［1954.12.14］

陳と学生は単に教師と生徒といった関係ではなく，深い思いやりで結ばれていた．1960年頃，陳は胃病などで何度も入院し，輸血が必要となった．その際，学生たちは積極的に病院に赴き，陳のために献血した[30]．

ところが平和な時間は長く続かず，「相次ぐ運動（政治）や闘争が重なると師弟の間も次第にぎこちなくなり，学生たちの足も遠のいてしまった」．不幸な時代によって学生との交流は断ち切られてしまった．

しかし，陳の妻は「この時代の彼の学生たちは，何年たっても彼のことを慕い，懐かしがってくれる．彼が世を去って 20 年近い歳月が過ぎた今でも，私たちを訪ねてくれたり，励ましてくれたりする学生はあとを絶たない」と述べているように，学生たちは陳の恩を忘れることはなかった[31]．実際，筆者も陳の教え子である李宗恵（人民大学教授・元中華人民共和国大阪総領事館領事）から，恩師への熱い思い出の詩「憶恩師」（「恩師への思い」）を頂いたことがある[32]．その最後の一句は「仰恩师 栽桃李 老实做人」（恩師を仰ぎ，桃李を植え，正直な人となり）である．

おわりに

本論では，まず陳信徳の経歴をより具体的に明らかにした．旧植民地台湾に生まれた陳は，日本語を「国語」として身に付けたので，ネイティブな日本語が話せた．日本の敗戦によって「中国人」となった彼は，時代の要請によって北京大学日本語学科の日本語教師となった．日本との国交がない時代，日本語教育は行われていなかったかに思われがちであるがそうではない．陳のように台湾であるいは旧満州で日本語教育を受けた人々によって，ひっそりとしかし確実に行われていたのである．

陳信徳は北京大学日本語学科の日本語教科書を地道な努力と熱意によって編集した．この陳の教科書の大きな特徴は文法の論理を重視することである．詳細な日本語文法を示した教科書がない時代，陳の教科書は日本語習得者の要望に応えるようなかたちで現れた．陳が編集した教科書は新中国における日本語教育に新たな系譜を作り上げ，新中国の日本語教育を支えていたことが明らかになった．

陳が教材研究に真摯に向き合った背景には，目の前にいる自らの学生を育てたいという強い想いがあっただろう．陳は学生たちと家族ぐるみで親しく交流し，彼らから慕われていた．妻が述べたように「陳は早くから中国と日本の友好的な交流を望んでいたし，また必ずその日が来ると信じていた」．陳は志なかばで倒れたけれども，「やり残した仕事は，学生たちや，若い世代の人たちが引き継い」[33]だと言えるだろう．

陳はまた家族への愛情豊かな人であった．その遺言には，30 年間喜びと悲しみを共にした妻への思いやりが溢れている．

> 私は…国家や人民，そしてあなたと娘に恥じることは何一つありません．このことをどうか信じてください．あなたと一緒に暮らした三十年間，わたしへの真心と誠実な気持ちに深く感謝します．生死離別に直面しているいま，あなたと娘のことだけを想い，そしてあなたに非常に感謝しています―わたしの忠貞なる伴侶．…もしわたしの身体がまだ耐えられるならば，わたしは必ずあなたたちと再会できるよう努力し，もう二度と離れません．万一耐えることができなければ，あなたはぜひ強く生き続けてください．身体を大事にして，わたしのことで心を煩わさないでね．あなたと子どもの幸せを祈ります．

本章には，まだいくつの課題が残されている．たとえば，陳が北京大学で教鞭を執った 1950 年に『日文初階』いう謄写版の日本語教科書を編集した．これは新中国の北京大学における最初の日本語教科書である．しかし，未だ入手できておらず，その実態は分かっていない．また，紙幅の制限で，陳が編著した『科技日語自修読本』（商務印書館，1960 年），『新編　科技日語自修読本』（商務印書館，1964 年），『訳注　科技日語自修文選』（商務印書館，1964 年）といった実践を重視する日本語教材，陳が主編となって編集した『日語』（1-3 冊，商務印書館，1963-1964 年）といった日本語習得者の共通教材，陳が 1961 年と 1962 年の五・四科学討論会で発表した論文「日本語の基本文型について」と「日本語の文論への一試案－ 1962 年五・四科学討論会の討論材料として」，陳の遺稿として後に公刊された「現代日語的句法」（1-4，『日語学習与研究』，1980 年 1-4 期連載），すなわち陳信徳と日本語研究については，まだ研究していない状態である．次の原稿に譲りたい．

1）北京大学日本文化研究所『日本語言文化論集』第 1 輯，北京大学出版社，1998 年，180-186 頁．

2）『京都帝国大学一覧』によると，陳能通は 1924 年から 1927 年までに京都帝国大学理学部に在籍していた．

3）『京都帝国大学一覧』によると，陳信徳は同志社中学校から進学してきた．しかし，2011

年 6 月 24 日午前，同社史資料室に問い合わせたところ，陳信徳の名前は卒業生名簿になかった．

4)「本校高等科生徒」(『第三高等学校一覧』昭和 3 年度）によると，陳は同志社中学校の出身で，入学区分は「特別入学」であった．この特別入学は，1911 年 4 月 4 日に公布した文部省令第 16 号「文部省直轄学校外国人特別入学規程ハ台湾人若クハ朝鮮人ニ之ヲ準用ス但其入学に関シテハ台湾総督府又ハ朝鮮総督府ノ紹介ヲ要ス」によるものであった．卒業年度は同一覧昭和 7 年度「昭和 7 年 3 月高等科卒業生　262 人」による．

5)入学年度は「学生及生徒姓名」(『京都帝国大学一覧』昭和 8 年度，405 頁）により，卒業年度は「卒業生姓名」(同一覧昭和 11 年度, 470 頁）による．教師陣は同一覧（昭和 8,9,10 年度の「文学部職員」による．

6)平林美鶴『北京の嵐に生きる』悠思社，1991 年 12 月，150 頁．

7)『京都帝国大学一覧　自昭和 12 年至昭和 13 年』（366 頁）によると，陳は 1941 年 3 月までに在籍した．

8)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』（151 頁）には，陳が文学部助手を拝命したと書かれているが，1936 年度と 1937 年度の『京都帝国大学一覧』を調べたところ，助手名簿には陳がいなかった．当時，京都帝国大学では副手，すなわち現在のティーチャーズアシスタントのような制度があり，陳は助手ではなく副手となったではないかと推測できる．

9)『京都帝国大学一覧』昭和 11 年，350 頁．

10)『京都帝国大学一覧』昭和 10 年，351 頁．

11)今西春秋，1933 年に京都帝国大学を卒業．日本の満州語学の草分けの一人であった．1938 年に京都帝国大学上野育英会留学生として北京故宮文献館で「満文老檔」の研究に従事した．1940 年 9 月に日本占領下の北京大学副教授，1943 年 9 月に教授となり，終戦により教授職が解任された．その後，国民党政府のもとで北京世界科学社に留用された．1948 年 9 月に北京大学講師に復職し，1950 年 8 月に副教授となり，満州語と日本語の講義を担当した．1951 年夏に反革命罪で逮捕され，3 年間の実刑を受けて 1954 年秋に国外追放となり帰国した．1956 年に招かれて天理大学おやさと研究所教授となり，1979 年 8 月 20 日に病死した．天理大学の人事記録と，末松保和・河内良弘「今西先生追悼記事」(『朝鮮学報』第 94 輯，1979 年第 4 号，237-239 頁）による．

12)魏敷訓，1935 年に北京大学日本語学科を卒業し，京都帝国大学国文学科に留学した．留学中に東方文化研究所経学文学研究室の青木正児や吉川幸次郎らの元曲研究に携わり，ともに『元曲選釋』を編集した．卒業後に北京大学の専任講師となり，終戦前に副教授に昇進した．

13)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，170 頁．

14)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，170 頁．

15)「冒険家的一枕黄梁」, 朱振才『建国初期北京反間諜大案紀実』中国社会科学出版社, 2006 年 3 月参照．

16)人民網 http://www.people.com.cn/GB/historic/0929/3200.html 参照．

17)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，181 頁．

18)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，30-31 頁．

19)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，5 頁．また，王友琴「紀念一位英雄的母親」（『文革受難者』（香港）開放雑誌出版社，2004 年）によると，1995 年，陳の独り娘，昭宜氏は山西省で父親の遺骨を見つけて京都の墓に入れた．

20)拙稿「岡崎兼吉－新中国北京大学の日本語教育とともに歩んだ『老専家』」参照．

21)北京大学東方語言文学系劉振瀛教授治喪小組「劉振瀛教授生平」（1990 年 1 月 16 日）によると，劉は 1915 年に生まれ，1935 年に日本へ留学した．1941 年に東京高等師範学校を卒業し帰国し，北京師範大学日本文学系の副教授となった．

22)拙稿「中日国交断絶期における唯一の日本語・日本文学教授－徐祖正」参照．

23)孫宗光の証言によると，当時，陳信徳は 1-2 年生の基礎教材づくりを担当しており，徐祖正と劉振瀛は 3 年生以上の教材編集を担当した．

24)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，191 頁．

25)陳信徳編著『現代日本語実用語法』下冊，時代出版社，1959 年 3 月参照．

26)陳信徳編著『現代日本語実用語法』上冊，（北京）商務印書館，1964 年 1 月参照．

27)陳信徳編著『新編　科技日語自修讀本』商務印書館，1964 年，3 頁．

28)「内容提要」，陳信徳編著『現代日本語実用語法』上冊，（北京）商務印書館，1964 年 1 月参照．

29)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，181 頁．

30)陳昭宜「怀念我的父亲陈信德」，北京大学紀念陳信徳先生冥誕九十年座談会での講話，1996 年 3 月 30 日，2 頁．

31)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，182 頁．

32)2009 年 9 月，筆者が『新日漢大辞典』（北京出版，2001 年）と『実用日漢科技詞典[新版]』（中国語，商務印書館，2007 年）の編集者である顧明耀と尹学義の両氏のご尽力より，西安交通大学で新中国日本語教育史研究座談会を開催した．その際，李宗恵氏から頂いた．この詩は，李が 1991 年 11 月 13 日に作ったもので，1997 年 11 月に陳の娘に贈ったものである．

33)前出，平林美鶴『北京の嵐に生きる』，182 頁．